

「法輪寺三重塔再建裏話」



太田 統士

はじめに

我が国最古の塔であった国宝法輪寺三重塔は、1944年落雷により焼失した。現在の塔は前任職井上慶覚師により1965年(昭40)頃から再建計画が始められたが、用材が確保された段階で1969年(昭44)住職の逝去により資金難で工事がストップしていた。後に幸田 文女史らの貢献により1975年(昭50)に落慶したもので、これは法輪寺即幸田 文としてよく知られている話である。ここでの裏話は再建法輪寺三重塔の設計と工事にまつわる建築論争である。

飛鳥様式に基づく三重塔の復元設計は、我が師である竹島卓一教授の手になるものである。因みに竹島教授は伊藤忠太先生の弟子で、東洋文化研究所を経て名古屋工大教授、兼法隆寺国宝保存工事事務所所長として赴任。

後に中国宋時代の『营造法式の研究』により第36回日本学士院恩賜賞授与されている中国古代建築史の学究である。

小生らは3年生の夏休に、法隆寺の工事事務所の片隅で解体部材の保存図作成(美濃紙に烏口でトレース)のアルバイト。「そんなもん描いただけでお寺解ったつもりやったらあきまへんで」などと、通りかかった西岡(常一)棟梁に皮肉られたこともあった。

残念ながら卒論は、「東京・名古屋の百貨店の昇降設備機能計画論」となり3名で調査、執筆となった。

法輪寺大論争

三重塔再建を悲願としていた先代住職慶覚師は、浄財を集めるためにも設計図が必要だと再建図を竹島教授に依頼。西岡(常一)棟梁の腕に信を置きながらも、古代の構造的欠陥を補う意味と、将来の修復に配慮して鋼材補強を取り入れ、近代的学術・技術の粋を設計に盛り込んだ。

ところがこの鋼材補強が西山棟梁の拒否に遭う。西岡棟梁は代々伝承してきた法隆寺大工の技と、千年に耐えるヒノキの可能性の信奉者で、何故鉄を使わねばならないか。「このままの設計では棟梁を降る」とゴネ、関係者を困らせることになったが、住職の取りなしでもとかく1967年(昭42)着工に至った。しかし前述のように1969年(昭44)に先代住職が亡くなり、資金難も加わりしばらく工事が中断された形となった。

後を継いだ二男の新住職の康世師も先代住職の悲願を受け継ぎ、全国行脚などで資金集めに奔走されているのを幸田 文女史が見て、復元に向け献身的な応援をされ、

清水建設が元請けを買って出て工事が再開される事になった。とはいえ竹島/西岡の対立はより激しくなり、文化庁や建設委員会も明確な結論が出せず、結局は最低限の鉄骨使用と云う曖昧なことで工事は1975年(昭50)3月に完成した。

憤懣やるかたない竹島教授は同年4月9日の毎日新聞夕刊に『「法輪寺三重塔設計と施工」秘術に抑えられた将来計画』と題して自説を発表、西岡棟梁を批判する非常手段に出た。

竹島教授の意見

要旨は、明治30年大の解体修理の際の実測図の書き込み寸法が意外に少なかったことや、江戸時代の2回の修理で創建当時の姿が変えられていたと考えられることや、同時代の法隆寺や法起寺の塔など、多年の建築技法史から飛鳥様式に復元設計図を作成した。更にこの再建が昭和の時代の新築であることを重視、古代の寺院建築の構法的欠陥を補う意味と、超高度な技能者でなくても施工でき、更に遠い未来、木材や技能者不足でも修復可能なようにとの配慮で、鋼材補強を取り入れ設計した。これに対し西岡棟梁は「鉄材の補強なんて屁のようなもの。オレがつくれば木だけで千年でも二千年でももつ。法隆寺は現に千三百年も保ってきたではないか」と。確かにお説のとおりであるが、創建当時の姿で保ってきたわけで決してない。軒下に支柱を入れたり、内部に隙間もないほどに補強剤を詰め込み、修理に修理を重ねてようやく保たせてきたのである。小手先の技術や伝統的な精神力だけでは対抗し得るもので無いことを悟るべきだ。

これにたいして西岡棟梁は、『木のいのち 法輪寺の三重塔の再建と、竹島博士の所論の答えて』と題して4月15日の同紙夕刊で反論。

西岡棟梁の反論

概要は、形だけでなく、内部も飛鳥の工人のやったとおりに作りたい。鉄材を使って構造を変えるのは飛鳥人への冒瀆であり、復元に、新しいさかしら知識は捨てて、真の飛鳥の魂に近寄るべきだ。

なるほど鉄は力が強い。しかしヒノキは生命力が強く、長い。これは長年の経験から得た信念である。法隆寺は慶長時代(1600年代)の修理で鑄鉄のカスガイが使われ、法起寺の明治の修復でも鉄のボルトが使われていた。しかしサビがひどくその周りのヒノキも腐らせている。鉄の生命

がサビで滅びるとともに建物全体の生命も終わらせてしまう。科学的でないというかも知れないが、私たち宮大工は「千年の樹齢の木は千年保つ」と云う。

木材の真の強さ、尊さをご存じない先生方が、鉄を強く信頼することに私たちは不安を抱くのである。飛鳥の工法にたとえ欠陥があっても、むしろそのままに伝えるべきべきだ、それがほんとうの復元ではないか。

以上が世にいう大論争である。法輪寺三重塔と云えばとくに幸田 文女史と西岡棟だけがクローズアップされ、以上の秘話は忘れ去られようとしている。小生等はこの経緯をつぶさに見て来たし、後年竹島教授の邂逅談も伺っていた。

結論ではないが、元請けであった清水建設の工事主任、八木悠久夫氏の述懐を引用させていただく。

「20世紀の技術を駆使して古代飛鳥建築の理想を追求・再現しようとした竹島先生と、宮大工として代々伝承してきた技術をもって再建を望む西岡棟梁の間には激しい論争がありました。それはお二人の塔を愛する信念から来るものです。何百年か後にその時代の人たちが塔を評価してくださる。それがわれわれ技術屋の宿命なのです」

西岡棟梁は小原二郎先生の「法隆寺を支えた木」(1978年NHK出版協会)に取り上げられて以来、数々のマスコミに登場しているが、竹島ばかりでなく、藤島亥治郎先生や田村治郎先生とも激しくやり合っている。

2008年、法輪寺を再び訪れた折りに、堂守をなさっている先代住職のお嬢さんと竹島教授の事など懐かしくお話できた。



法輪寺三重塔(2008)

再建の設計を依頼されたのは十五年も前。今や大工の技術は昔と比べて、飛鳥時代の建築技術はほとんど失われてしまった。その中で、飛鳥時代の建築技術を守り、伝えることが、竹島先生の使命だ。

学芸

再建された法輪寺三重塔(幸田)後方に見えるのは法隆寺三層塔

法輪寺三重塔設計と施工

秘術に抑えられた将来計画

竹島 卓一

竹島卓一は、飛鳥時代の建築技術を守り、伝えることが、竹島先生の使命だ。その中で、飛鳥時代の建築技術を守り、伝えることが、竹島先生の使命だ。

再建された法輪寺三重塔(幸田)後方に見えるのは法隆寺三層塔

木のいのち

法輪寺三重塔の再建と、竹島博士の所論に答えて

西岡 常一

竹島博士の所論に答えて、西岡常一は、飛鳥時代の建築技術を守り、伝えることが、竹島先生の使命だ。その中で、飛鳥時代の建築技術を守り、伝えることが、竹島先生の使命だ。